

vol.21

C'n

SCENE
NEWS

CHIBA CITY MUSEUM OF ART



THE ESSENTIAL

ジ・エッセンシャル

現代と伝統

春の訪れが早く、桜の花もいまだ迎える準備が整わない内に咲き初めて、あわてさせられたことでした。待ち望んだ末の訪れは格別のものがありますが、不意打ちのような満開の花の華やぎも、驚沢なものと喜ばされました。何か良いことのある吉兆なのかと、楽天的な気性の私などは期待しているところです。

さて、新しい年度に入って最初の当館の特別展は、「ジ・エッセンシャル」と題されています。「本質的なもの」と日本語に訳せば良いようです。企画担当の学芸員による解説では、「私たちの感覚を揺さぶる働きを純粋に追求している」現代日本の、四人のアーティストによる意欲的な展示が期待されるということです。光線、鏡、木彫、それにローソクを燃焼させることによる、寡黙で、静謐な表現は、私たちに、この宇宙の、自然の、根源的で本質的な律動感や、実と虚のあい（間）を往来する非日常の感覚を、体験させてくれるようです。何かとさわがしく、混乱した日々の生活から離れて、静かに感性をとぎすまし、いままさに生きつつあるこの世界と人生の「ジ・エッセンシャル」に、あらためて心を澄ませ、遊んでいただければ幸いです。

現代最前衛の芸術活動の一傾向が紹介されるわけですが、これと関連して、日本美術の特質について考えてみました。

私たちが住むこの日本列島は、欧米を中心とした世界地図では、まさしく極東の、右はじに位置させられています。東の果ての海の中の小さな島国は、様々な文明、文化が遠く、近くより及んできましたが、そのまま直接に伝わるのではなく、一種

のフィルターにかけられた後のように特殊な受け止め方がされてきました。すぐ隣りの朝鮮半島からも、あるいは中国大陆からも、私たちの祖先が自らの感性や知的関心、あるいは倫理感や宗教的な信条などに照らして、よしとしたもののみを分別し、選択して受け入れ、元からある伝統的な文化の上に新しい性格や傾向を付け加えてきたのです。したがって、東アジアにあっても、日本の文化、あるいは美術そのものの個性も、他の国々や地域とは、いちじるしく異なるものとなっているのです。

日本美術の特質については古くから、外国の人や日本人自身によって、様々に語られてきました。それらのいくつかを列記してみましょう。「簡明であること（シンプリシティー）」、「清潔であること（クリーンネス）」、「清純であること（ピュアネス）」、「遊び心にあふれていること（プレイフルネス）」、「素直で率直なこと」、あるいは「のどかで深刻ぶらないこと」などなど。これらを合わせてみると、今回の「ジ・エッセンシャル」に参加して下さった四人の現代美術家が求めている方向と、大きくへだたったり異なっていないように思われるのです。私の思い違いかもしれませんが、日本の伝統的な美しいものへの指向性が、なお根づよく生き続けているようです。開催を目前にひかえて、その予感が当たるか、あるいはみごとに外れるか、作品との出会いを楽しみにしているところです。

館長 小林 忠

ジ・エッセンシャル

何人かのアーティストが集う、こういった現場制作の展覧会ではいつもそうですが、展覧会を立ち上げるためにアーティストを選び、コンセプトを明確にしなが、タイトルを付ける作業とは、多元方程式を解くようなところがあります。アーティストは、美術館が定めたコンセプトに従って作品を制作するわけではありません。逆にアーティストの制作が、コンセプトを設定させるのです。だから作家のプランがまだ構想途中、展覧会の全体像が定まらないうちに、包括するコンセプトを設定してタイトルともするわけです。この展覧会では制作から帰納されたのが展覧会のコンセプト、それがすなわち「ジ・エッセンシャル」です。「エッセンシャル」とは「本質の」「欠くことのできない」という意味。では、どういう作家たちの作品が見られるのか、以下に紹介しましょう。

順路順で、受付のある8階展示室1、2には4作家の内一番のベテラン、逢坂卓郎さんの作品が展示されます。逢坂さんは、かねてから様々な形態での光線に素材にしてきた作家ですが、ここでは近年のテーマである宇宙線を捕捉する作品です。明暗一對、2点の作品から成り立ち、一方の作品では宇宙線が通り過ぎたときにLEDが点灯、もう一方は消灯する仕組みです。宇宙線とは星が死滅するときと誕生するとき大爆発を起こし、その際に飛散するエネルギー。地上には低エネルギーの二次宇宙線のかたちで到達し、1秒間に200個の割合で人体をも通り抜

ているそうです。センサーで捉えられた宇宙線、すなわち宇宙のリズムが視覚化されています。

一旦ホールに戻って、次の部屋、展示室4は大塚聡さんの作品です。まださほど有名ではありませんが、実に興味深いインスタレーションを見せてくれます。この部屋のミラーと光線によるインスタレーションが1点だけの部屋です。壁面にはめ込まれたその装置に集中力を吸い込まれるような不思議な、一筋の光の往来を感じ取ることが出来るでしょう。作者が最近発表した作品は、作者自身の解説によると、鏡面上の虚像の中にもう一つの光を加え、発光点と消失点、イメージとしてのリフレクションについての考察とともに、虚像と実像、空間と光の関係を開かれた鏡面上に展開した作品です。大塚さんの作品は7階の展示室5にも展示されます。

となりの部屋、展示室3は須田悦弘さんの作品です。須田さんも若手の作家ですが、ここ数年随分と有名になって、あちらこちらの国際的な展覧会でも活躍しています。この部屋の真ん中に作られた細長い通路の向こう側に泰山木の花一輪が据えられています。ここで説明してしまうことには非常に躊躇を覚えるのですが、これは須田さんが木材から彫りだした木彫の作品です。自然の造形である植物、それがアーティストという人間の仕業であったことを感づくその瞬間に、感覚が修正を余儀なくされます。そして次の瞬間、広い展示室の中でほんの一隅を占

める花が、空間全体を支配しはじめていることに気付くのです。

7階の最初の部屋は大塚聡さんのもう一つの展示。その次の部屋、展示室7は渡辺好明さんの作品「光ではかられた時 - ホライゾン」です。この作品は、普段壁面に一列に口ウソクが並んでいます。決まった時間に点火されます。炎というのは、不断にかたちを変えながら揺らめいているもので、誰でも経験したことがあるように、しばし眺めていてもなかなか飽きないものです。炎は、順次隣の口ウソクへと燃え移ってゆきます。僅かずつ燃え移り、一本ずつは次第に燃焼して短くなり、それらの変化を観察しながら忘我のときを過ごすことが出来ます。対照的に「光ではかられた時 - 球」は、会期中ずっと、ゆらゆらと炎がゆらめき続きます。

続く展示室8には須田さんのもう一つのインスタレーション

です。須田さんは千葉市美術館で展示をすることがきまってから、館のコレクションを物色していたのですが、ある寄託作品の屏風に気付きました。その屏風と自作を展示ケースのなかで関係づけようという作品です。古典と現代の垣根を無理なくとりはらおうという、千葉市美術館の普段からの試みを、作家の視点から実現します。

そして最後に1階にありるとさや堂ホールには「光ではかられた時」の異なるヴァージョン「オーナメント」が展示されます。このホールが銀行として昭和2年に建築された当時から残る床のタイル紋様を利用したインスタレーションです。「光ではかられた時」は点灯時間が決まっていますので、ご注意ください。

学芸員 半田 滋男

アーティストの言葉

逢坂卓郎

啓示 - 宇宙線によるインスタレーション

Revelation - Installation by the cosmic ray



逢坂卓郎《大気圏》
宇宙線によるインスタレーション
1999年 於コバヤシ画廊

間断なく宇宙の彼方から地表に降り注ぐ宇宙線のシャワー。見る事のできない無数のエネルギー粒子をリアルタイムで視覚体験した時、私達はそこに何を感じるだろうか。私は自然現象を視覚化する仲介者に過ぎないが、この仕事を止める事ができない理由がある。宇宙線の光シャワーの中で、様々な思索にふける事があるからだ。それは宇宙の壮大さであったり、自分の存在感を大きく感じたり、小さく感じたりする人間の不確かさであったりする。そして予測できない光の周期の前に不安感が安らぎへと変わって行く心理の逆行現象まで起こる。この光の向う側に広がる宇宙だけではなく、私達を存在させている意味や意志を感じるからだろうか。

今回は、参観者がエネルギー線に囲まれている平行状況と、エネルギーの断面に対峙する対面状況を設定する。宇宙線を捕らえて発光する光ラインの同じ信号が、違う場所で常時点灯している発光体を消す。ひとつのトリガーによって全く反対の現象が起き、それを同時に見る事はできない。宇宙は、そのような反世界的な構造を持っている。

須田悦弘

今回、千葉市美術館に寄託されている江戸期の屏風に新作をからめて発表する。

何点か美術館のコレクションを見せていただいた中で一番ピンときたこの屏風、かなり個人的に気に入っているのが邪魔にならない様にうまくからめられればと思う。

須田悦弘 《泰山木・花》 1999年
於ハラ・ドキュメント6（原美術館）
千葉市美術館蔵



大塚聡

今回の展示に用意したもの。
鏡、光、写真、定規、カメラ、時間、空間。
今回の作品に込めたもの。
発光と消光、虚と実、二つの光、異調と同調、瞬間性と永遠性、記憶と現在。
それぞれの間に派生するもの。
リフレクション、中間的領域。
そこで繋がるもの。

大塚 聡 《無題》2000年
ガラス、鏡、他

渡辺好明

本展では、「光ではかられた時」と題した蠟燭による3つの異なったインスタレーションが制作され、いずれも会期中燃やされていく。美術館1階さや堂ホール（昭和2年建設 旧川崎銀行千葉支店）では、列柱に囲まれた2面の床モザイクによる縁飾り（オーナメント）の模様に従って蠟燭が立ち上げられ、ドミノのように次々と燃やされていく。7階の一室では、直径1mの蠟の球体に灯された火が静かに深い穴を穿っていく。同室の壁面では全長30m余に亘って蠟燭が並べられ、壁面に深い痕跡を残しつつ炎の水平線が出現する。



渡辺好明 《光ではかられた時 - ビタゴラスの樹》
2002年 蠟燭
於スピカ・ミュージアム

ジ・エッセンシャル - 逢坂卓郎、須田悦弘、大塚聡、渡辺好明

THE ESSENTIAL - Takuro OSAKA, Yoshihiro SUDA, Satoshi OTSUKA, Yoshiaki WATANABE

会期 2001(平成14)年4月9日(火) - 6月2日(日)

時間 10:00 - 18:00 金曜日は20:00まで(5月4日〔祝〕を除く)

休館日 毎週月曜日

但し4月29日(月/祝)開館,翌4月30日(火)休館

5月6日(月/振)開館,翌5月7日(火)休館

入館料 一般1,000(800)円 / 大学・高校生700(560)円 / 中・小学生300(240)円

カッコ内は前売・団体30名以上の料金

前売券はJR東日本びゅうプラザ、千葉市美術館ミュージアムショップ(3月29日まで)で発売

主催 千葉市美術館

協力 日亜化学工業株式会社, J WORKS, 旭硝子株式会社

講演会 5月18日(土)午後2時より(開場:午後1時30分)

《現代美術 - もうひとつの動向》

- ポスト・ミニマル/ネオ・コンセプチュアルの展開と日本のアーティストたち

講師:鷹見明彦氏(美術評論家)

11階講堂にて 参加無料 先着150名様まで

アーティストと語る

須田悦弘 4月13日(土) 午後2時より

逢坂卓郎 4月14日(日) 午後2時より

渡辺好明 4月20日(土) 午後2時より

大塚 聡 5月11日(土) 午後2時より

8階展示室入口にお集まり下さい 参加無料 但し入場券は必要

美術館の所蔵品より

鈴木治(1926-2001)は、現代陶の第一人者として知られている。1948年、八木一夫(1918-79)や山田光(1923-2001)たちと共に、前衛陶芸家集団「走泥社」を結成(98年に解散)。以後、会の内外で活躍した。氏みずからが「泥象」と呼んでいた立体造形の特徴についてはこれまでもさまざまな面から語られているが、ここでは作品における彫刻的性格が高い評価を得ていたことを紹介しておきたい。たとえば、73年に箱根にある彫刻の森美術館のコンクール展に招待されていることなどは、その証左となろう。

本作品は、直方体(六面体)の小さな面をへこませ、対する面を突き出すことで、魚のイメージを獲得している。きわめて単純な構造ながら作品が単調なものとなっていない理由は、この小さな面の処理によって生まれる運動にあり、それを支えるために最低限必要な縦横の比率が作品全体に求められている。このような部分と全体の有機的な連関こそは近代以降に成立した彫刻の要諦である。作者の造形の確かさによって生まれた一点。

氏の生前、作品名の由来についておたずねしたことがあるが、その際即座に「箱河豚みたいですけども、まあ、春ですから鱈ということですか」という答が笑顔と共に返ってきた。これは八木、山田、堀内正和(1911-2001)そして辻晉堂(1910-81)といった猛者連と、長い年月にわたって芸術について、あるいは人生について真剣な応酬をされてきた氏の機知である。

土は信楽、焼成は穴窯という原始的な窯によっている。

学芸員 藁科英也



鈴木治《春ノ魚》

穴窯泥象 19.5 × 28.8 × 18.6cm

1988年

アンジェ美術館展 - ロココ絵画の華

6月8日(土)-7月14日(日)

アンジェは、フランス中西部、ロワール河畔に位置する美しい都市です。この街の中心には、中世の城塞が勇姿を誇り、紀元前より交通および戦略上の要衝として栄えた古都の歴史を物語ります。

アンジェに美術館が創設された時代は古く、フランス革命期にまで遡ります。「アンジェ美術館」は、ルーブル美術館等と並び、フランスにおいて最初期に創設された美術館の一つなのです。アンジェの貴族ピエール＝ルイ・エヴェイヤール・ド・リヴォワ侯爵（1736-90）が蒐集した華やかな絵画コレクションを核に出発した美術館は、その後フランス政府からの寄託や、コレクターからの寄贈、アンジェ市による購入を通して、今日の豊かなコレクションを築き上げました。

本展は、「アンジェ美術館」の増改築に伴う一時閉館に際し、同館が所蔵する17世紀から19世紀にかけてのヨーロッパ美術の名品を選びすぐり、紹介するものです。

展覧会の中核となるのは、リヴォワ侯爵が蒐集した、ワトー、

フラゴナール、グルーズ、シャルダンをはじめとする、18世紀フランスのロココ絵画です。なかでも、貴族たちが戸外で集う情景を描いた、ワトーとその周辺の画家たちによる「雅宴画（フェット・ギャラント）」が、展覧会の大きな見どころと言えるでしょう。夢と現実が一つに響き合う美しく詩的な世界は、ブルボン王朝期（ルイ14世末期～ルイ15世）の宮廷文化の精華を伝えてくれます。さらに、フラゴナールの初期の代表作《ケファロスとプロクリス》も、ロココの優美さを示す典型的な作品として見逃せません。

ロココ絵画以外にも、「アンジェ美術館」にはいくつか見どころがあります。新古典主義の雄アングルや、ジロデ、ジェラルールら、18世紀末から19世紀にかけてサロンで活躍した画家たちの作品が、多数出品されます。また、18世紀ヨーロッパ最大の装飾画家と称されるティエポロや、ロレンツォ・リッピ、カノーヴァの作品をおさめたイタリア美術に加え、17世紀の北方絵画なども出品されます。

200年の伝統を誇る「アンジェ美術館」コレクションを日本で初公開する本展は、これまで国内で紹介される機会の少なかったロココ絵画を中心にヨーロッパ美術の大きな流れを展観できる、またとない機会となるでしょう。



ジャン＝オーギュスト＝ドミニク・アングル
《パオロとフランチェスカ》1819年
油彩・カンヴァス 50×41cm

ジャン＝アントワーヌ・ワトー
《待ちうけられる愛の宣言》1718年頃
油彩・カンヴァス 67×51cm



ジャン＝オノレ・フラゴナール
《ケファロスとプロクリス》1750-55年頃
油彩・カンヴァス 79×173cm

高村光雲展

7月16日(火)-8月25日(日)

高村光雲(1852-1934)の名からは、日本近代彫刻の祖、詩人で彫刻家の高村光太郎の父といったこと、あるいは代表作の《老猿》(東京国立博物館蔵) 東京・上野公園の《西郷隆盛像》などが思い浮かぶかもしれませんが、しかし、こうしたこと以外に光雲についてはあまり広く知られていないのが実情です。

嘉永5年(1852) 江戸下谷に生まれた高村光雲(初名・中島光蔵)は、文久3年(1863)から11年間仏師高村東雲に入門、木彫の世界に入りました。幕末から明治初期にかけて伝統的な木彫は衰微する一方でしたが、光雲は木彫を続けます。

光雲は皇居造営に伴う装飾彫刻を担当する他、日本美術協会等に出品し、明治22年(1889)には東京美術学校開校と同時に同校に勤務、翌年には教授に就任、帝室技芸員にも推挙されました。美術学校時代には、シカゴ万博に《老猿》(明治26年)を出品する他、《西郷隆盛像》(明治31年完成)《楠公銅像》(明治33年完成)などの銅像制作に従事するなど、江戸時代以来の伝統的な木彫技術と西洋彫刻の融合に腐心しながら、写実表現を基調とした新しい彫刻表現を創造して近代木彫のパイオニアとしての地位を固めます。また、光雲の門下からは山崎朝雲、米原雲海、平櫛田中をはじめ多くの木彫家たちが輩出し、以後の彫刻界に大きな足跡を残しました。

この展覧会は、光雲の木彫約80点や画稿類の他、光雲周辺の木彫家たちの作品約40点をあわせて展示し、近代彫刻史に光雲が果たした役割と後世への影響について紹介する、初めての本格的な高村光雲の遺作展です。



高村光雲
《老猿》明治26年(1893)
重要文化財
東京国立博物館
(撮影・高村規)



三代歌川豊国
《五代目松本幸四郎の幡随長兵衛》 文久3年(1863)
大判錦絵 36.1 x 24.2cm

所蔵作品展

江戸後期の役者絵 - 江戸と上方

6月8日(土) - 7月7日(日)

江戸後期は、歌舞伎文化が爛熟し、江戸でも京都・大坂でもたくさんの役者絵が描かれた。本展は、千葉市美術館が所蔵する肉筆画及び版画の歌舞伎関係の作品の中から100点余を展示いたします。豊国・豊広の大絵馬の下絵5枚や三代豊国画の錦昇堂役者大首絵50枚などを一挙に展示いたします。

展示室で考える

さまよえる順路

前回に続いて皆様からいただく苦言の一つを取り上げてみたいと思います。それは「作品を見る順路が分からない」「出品番号順に作品が並んでいない」といったご意見です。何か言い訳のコーナーになってしまったような気もしますが、悩める順路の問題について少し考えてみます。

そもそも当館の展示室は、部屋が細かく分かれており、部屋によって天井が低かったり、展示ケースがあったりなかったりします。部屋とテーマの区切りが都合よく合う場合はよいのですが、まずそのようなことはありません。出品・構成順どおりだと大画面作品が天井の低い部屋あたってしまうとか、保存上展示ケースに入れるべき作品なのに展示したい場所にケースはなし...という場合がほとんどです。それをある程度解消してくれるのが、可動壁や可動展示ケースですが、これもやたらに設置すればいいというわけではありません。可動壁はレールのあるところしか通りませんし、可動展示ケースはその「背中」だけ「おしり」だけを皆様にお見せしたり、袋小路のような不安な空間をつくるご無礼を避けて置きたいものなのです。

お借りした作品などは、ご所蔵の方のご意向に沿うように展示するのが筋です。同じ形態の作品でも所蔵者が違えば展示方法が違うこともあります。また展示する意味合いにおいては同様のものであっても、小さい作品のすぐ隣に大きな作品を並列したり、人物画などで、隣の作品と互いにそっぽを向いた図柄のものを並べておくのも視覚的に落ち着きません。展示品の間隔は作品の大きさにもよりますが、展示の最初と最後とで全然間隔が違うというのも変です。作品の中心の高さもある程度統一感を持たせます。

日本美術などの展示、特に絵巻物などは右から左へ鑑賞するものですから、右から左への左回りの順路を基本とします。もちろんお客様の流れがぶつかってはいけないのですが、展示室の構造上順路を交差せず左回りをキープするのは至難の業(無理?)です。順路を示す矢印を乱発するのもあまりよい雰囲気とはいえないので、これは必要最低限に抑えています。

一方であまり順番どりに見ていただいても意味がない展示である場合もあります。順番によって何かのカテゴリーやストーリーが語られる展示ではなく、美そのものを主眼とした展示の場合です。現代美術に多い方法です。まずその空間を感じて、公園を散歩するように好きな作品を好きな順番で見ていくことも楽しい鑑賞の方法であろうかと思えます。

上記のことすべてを考慮に入れながら、自然で見やすい流れができるように展示構成を考えることが必要となりますが、これがなかなか難しく、ご苦言どおり、ああすればよかったなどと出来上がった展示に反省することもしばしばです。皆さんは、展示作品を見るわけでもなく、時々天井を見たりしながら不思議な風情で歩きまわる変な人を展示室で見かけることもあるかもしれません。それは間違いなく次の展示のために順路をシュミレーションし、可動壁の通る場所と空間を確かめながら歩く、苦悩中の担当学芸員です。



千葉市美術館

お問合せ：043-221-2311

ホームページ：<http://www.city.chiba.jp/art>

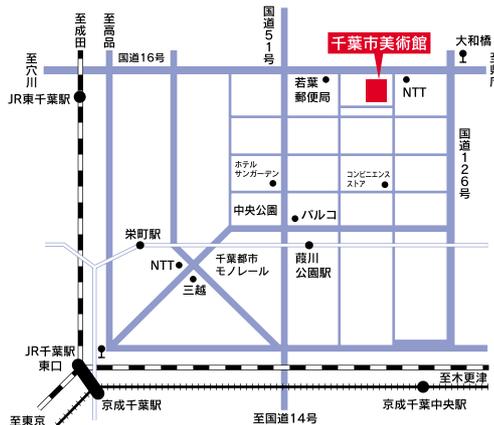
JR千葉駅東口より

徒歩約15分

バスのりば⑦より京成バス「大和橋」下車徒歩2分

千葉都市モノレール県庁前行「葭川公園」下車徒歩5分

京成電鉄千葉中央駅東口より徒歩約10分



千葉市美術館
Chiba City Museum of Art

【編集・発行】 千葉市美術館 〒260-8733 千葉県千葉市中央区中央3-10-8
TEL. 043-221-2311 FAX. 043-221-2316
Chiba City Museum of Art
3-10-8 Chuo, Chuo-ku, Chiba 260-8733 Japan

【発行日】 2002年3月31日

【制作・印刷】 株式会社プリンテックメディア